

だいひむけんじょうしょうが
「大悲無倦 常 照 我」

橋 秀 憲

昨年は御遠忌御正当年ということで、3月の御遠忌法要から11月の御正当報恩講と様々に50年に一度の御縁に、ご心配・ご配慮をいただきながら足を運んでいただきまして厚く御礼申し上げます。

昨年末のニュースで福島県飯館村の小学校3校と幼稚園2園が9ヵ月遅れの卒業・卒園式を隣の川俣町で行なったと報道されました。3月11日の震災で取りやめになっていた式に112名中105名の参加のもと執り行ったというものでした。自分たちの生まれ育った故郷をそれぞれ離れ離れという形で、今生活しているわけですが、小さな心には大変な出来事であったでしょうし、長年住み慣れた土地・家屋を離れ、そしていつ帰れるか分からないという状況は、保護者の方々も精神的にも耐え難い出来事だったでしょう。でも一つの節目の行事を行なえたことは本当に良かったと思います。

自分の知らないところで様々な支援活動が繰り広げられています。自分は何が出来るのか、一度は被災地に足を運んではいるけれど、いつかいつの間にか、その起こった大きな出来事さえ忘れ去ろうとする自分がいます。忘れずにこれからも自分に何が出来るかを継続して尋ねていきたいと思います。

飯館村の子供たちだけでなく、放射線による被曝をさけるために、より低い環境で過ごすことが願われていますが、真宗大谷派でも現地の仙台教務所を中心として支援センターが設置されており、教区の若手僧侶やボランティアが「子供たちを放射線から守ろう」という、つまりは子供たちが身体と心を回復するための「疎開」のお手伝いをするという取り組みも行なっています。セシウムということに限ってもその半減期は30年と言われているそうですから、本当に長期的な支援活動が必要だということが分かります。残念なことに、後何年で故郷に帰れますという確かなものが無いわけです。

私達は関係性を生きる存在で、一人では生きられない。その関係性において、愛したり、憎んだり、様々に反応しあうのですが、先達からその関係性のところに仏の存在があって、「同朋」という世界が拓かれてくるということを教わりました。単なる繋がりではなく、仏の願い・大悲をうける存在としての繋がりが願われます。どこにいてもどんな生活をしていても、ちゃんとすべてを受け止められる、そんな風に仏の願いに生きられたらと思います。ありのまま受け止めていく、そんなお任せする姿がこれまでも相続されてきたとも思います。どこにいても仏様が願いをもって見ていてくださる、そんな温かい場が備わっている、そういうことを確認していければと思います。